

『或る女』(1919〔大8〕年)をよむ  
——「主義の人」と「ローファー」をめぐって——

杉山直人\*

Reading *A Certain Woman* (1919) :  
“Man of Principle” and “Loafer”

Naoto SUGIYAMA

**Abstract :**

This essay discusses the relationship between *A Certain Woman* (1919) by Takeo Arishima (1878-1923) and his essay *Love Unsparingly Deprives* (1920) with the influence of Walt Whitman on both pieces in mind. As the first substantial translator of *Leaves of Grass* and its introducer into Japanese reading circle, Arishima based upon the appreciation of this American national poet was inspired to envision two types of men at large: “Man of Principle” and “Loafer.” Readers can get glimpses of these two human types in both the novel and the essay above mentioned. While a typical loafer protagonist Yoko Satsuki’s failure in self-fulfillment in her unrewarded love with Sankichi Kurachi shows difficulties in the fictional world confronting “Instinctive Life” cherished by this novelist, his double suicide in real life with a married reporter Akiko Hatano might suggest a martyr’s death to his enshrined idea. As Mishima committed harakiri indulged in Samurai ethos, Arishima might have pursued “the dream of self-fulfillment” as he believed he had grasped by studying Whitman in his selection of a sudden early death.

キーワード：有島武郎、「主義者」、「ローファー」、『或る女』

信仰の弱者たる嘆き

「神の信仰とは強者のみが与り得る貴族の団欒」で、そこに入ることができなかった自分は「単にその埒外にいて貴族の物真似をしていたにすぎないのだ。」(『惜しみなく愛は奪う』3章<sup>1)</sup>〔以後『惜しみなく』〕) 留学後、母校札幌農学校で教鞭を執りながら同時に札幌独立教会では日曜学校の

責任者を任され、教会員からは信頼されて将来を嘱望されていた頃の自分を回顧して作家が語った言葉である。聖書を自己存在の拠り所と定めてその教えを守って血肉化し、それにしたがって日々をおくることに違和感や疑問を生じない信仰の優等生を作家は「強者」と呼んだ。だが比較的早い時期から信仰に疑問を持つようになった有島<sup>2)</sup>は、4年間におよぶアメリカ・ヨーロッパ遊学か

\*関西学院大学国際学部教授

1) 作品テキストは岩波文庫、旺文社文庫、新しい筑摩全集版、昭和初期の新潮社全集版、さらには初版叢文閣のほるぶ復刻版などを参照した。以下ページ数ではなく、原則的に章番号で示す。

2) 川鎮郎は「有島武郎とキリスト教——研究史的に——」(『有島武郎とキリスト教』)のなかで、渡米まえの

ら戻ってきた頃にはキリスト教、教会有力者の偽善的あり方、はては信仰の優等生たろうとして外面をとり繕ってきた自分自身への懐疑を深めてゆく。「貴族」になろうと努め、自らの信仰が本物であるかのように偽り続けることに嫌気のさした作家は、唾棄すべき偽善者に墮落するかわりに、せめてもの誠実の証として「信仰」とは距離を置いてゆく。教会から有島が抜けたのは明治43(1910)年のことだった。『或る女のグリンプス』(以後『グリンプス』)に作家が筆を染めたのは、それからほどなくしてのことである<sup>3)</sup>。だから、この作品のなかでも信仰の貴族にたいして、かれらの団欒に加われなかった信仰の弱者が声をあげる場面に出会うことになる。

「木村さん。あなたはきっと、しまいにはきっと祝福をお受けになります……どんなことがあっても失望なさっちゃいやですよ。あなたのような善い方が不幸にばかりお遇いになる訳がありませんわ。……私は生まれるときから呪われた女なんですもの。神、本当は神様を信ずるより……信ずるより憎むほうが似合っているんです……ま、聞いて……でも私卑怯はいやだから信じます……神様はわたしみたいなものをどうなさるか、しっかり眼を明いて最後まで見ています」(『或る女』21章)

親族や「世の中」が期待したように木村との新婚生活に入って「今度こそ立派な奥さん」になるどころか、そのまま絵島丸で帰国し、やがて一年も経たないうちに倉地との生活に破綻、奈落に向かって突き進むことになる葉子が、婚約者をまえに語る別れの言葉である。短期間とはいえ一時期、葉子と倉地が営む暮らしに波多野秋子と果てた有島武郎の実人生を支えたであろう本能的生活をめぐる「思想」が垣間見えることを考えると、この

シアトルでの葉子の言葉、あんがい作家が作中人物の口を借りて自らの姿について吐露しているようでもある。かつては信者であっても今は教会からは離れた人物として設定されていることも含め、作家と葉子との近さについて忘れがたい印象を受ける。

今日有島研究は優れた先学たちの研鑽によって高い水準に達している。キリスト教とのかかわりをめぐる作家の伝記的研究はむろんのこと、明治大正の時代文化的背景とのかかわりを扱ったものからフェミニズムにいたるまで精緻な議論が多数展開されてきたことを知らない者ではない。だが日本文学の専門家でもない市井の一読者として『或る女』を再読するくらいは許されてもいいだろう。この作品がもつ迫力に圧倒されて書かずにはおられないから。そのさいわたしは、やはり荒正人のいう「聖書と性欲」(『白樺派文学』)という有島を論ずるさいに古くて新しい(それゆえ魅力的な)トピックを念頭におきたい。敬虔な信者だった青年期には「聖書と性欲とが激しい争闘」(筑摩版3巻133-4)を自分のなかで練り広げた<sup>4)</sup>と作家自身が認めるように、性をめぐる聖書と自己の葛藤はいつの時代にあってもキリスト教に近づく者の心をとらえるからである。

いちどは有島を将来の後継者に、とまで彼を気に入っていた内村鑑三から始めよう。作家の死後一月を経た大正12年7月、腐乱死体の身元が確認された頃内村鑑三は『萬朝報』で有島を「背教者」と呼んだ。顔に「天国の希望が輝く」ほどの「誠実熱心なる基督信者」だったはずの有島が信仰から離れたあげくに引き起こした(としか、少なくともこの新聞記事に表れた限りでは内村は理解しなかったようである)情死を嘆き憤ったのである。内村のために言えば、離教後も人としての

、明治36年4月という早い時期に、すでに「神議論」的懐疑が彼にはあったのではないかと論じている。もっと人間くさい見方もある。「有島がキリスト教を離れた理由はいろいろあるが、その最たるものは、彼自身をも含めて偽善的な信仰のあり方を許せぬとする、潔癖な倫理意識からであって、キリスト教の教義との対決、その克服、否定の側面は極めて薄弱だと言わざるを得ない。」というのは上杉省和である。(上杉 254~55) 興味深い指摘である。

3) 『グリンプス』は『或る女』の前半21章までに相当する。当初雑誌『白樺』に明治44年1月号から大正2年3月号まで断片的に掲載された。のち中断するが、大正8年1月から「増補改題」が開始され完成した後半部ともども、『或る女』として完成。同年6月には叢文閣から著作集第9号として上梓される。(福田 222)

4) 性にたいする作家の生真面目さや潔癖さをめぐるのは、『借しみなく愛は奪う』冒頭部での「告白」や『リビングストン傳』第4版序文で語られる看護婦のエピソードなどが直ちに思い浮かぶ。

有島の性格に変わりがなかったことを、内村は認めている。「彼（有島）は正直なる、コンシエンシャス（良心の声に忠実なる）人」であったと。（岩波版『内村鑑三全集』27巻527）

作家の死をめぐるあれこれ取り沙汰する人びとを無視するように、内村は日記のなかで事件を「明白な問題」と呼び「善悪の議論を戦わすの必要は少しも無い」と断言する。「有島氏が今度なした事を善しと思う余の友人は、この際、断然余と絶交して欲しい」（教文社版『内村鑑三日記書簡全集』2巻331）と彼一流の歯切れよさ。無教会主義の唱導者にしてサムライ基督教の総本山たるこの人物は小説を嫌った。男女関係や恋愛感情の機微をとりあげることが多い日本文学の伝統にたいする反発をもっていた彼はだから、日本男子を「女らしき意気地なし」にした『源氏物語』のような文学は「われわれのなかから根コソギに絶やしたい（拍手）」（「後世への最大遺物」とまで青年たちにむかって豪語する。こうした立場をとる内村にとっては、人妻と首をつって果てた有島の死は「背教文士全体が自分に対して新たに戦いを挑ん」でただけにすぎぬ、ということにもなるらしい。

あるいは、神がこの事によって、彼ら全体をさばきたもうたと見ることもできる。しかし彼ら文士は神の審判ぐらいを恐るる者ではない。そむくのが彼らの生命である。挑戦また挑戦、神と道徳をあざけりながら死に就くのが、彼らの名誉とするところである。神もわれらも、彼らをいかんとすることができない。（同上330）

「そむくのが彼らの生命である」と内村が喝破したのは、彼の立場からすれば正しいのだろう。しかし、もしそこで内村の有島理解が止まっているとすれば、内村は信仰の弱者がもつバツの悪さ、苦しみへの共感を欠いていると言うべきではないだろうか。この言葉のなかには、信仰という理想に寄って立つことのできた内村鑑三という人間と、ホイットマン流の自我解放の理念に基づく人間の営みそのものを描きだすことを生業とした作家有島武郎との、簡単には埋めることのできない亀裂が要約されていることになる。宗教と文学の

断絶である。

人間には先天的に二種類あると言う有島は、ホイットマンを論じたなかでふたつの定義を紹介している。いっぽうにはひとつの目的や主張を見つけ、それに自分を適合させ、あげく「遵奉する主義の為には、甘んじて一身を犠牲にして顧みない」タイプがある。「理想家」である。かつての師、内村鑑三が「主義の人」（「主義者」）であるのは言うまでもない。

もうひとつのタイプとは、もちろん「ローファー」である。理想を求めて道を究めようとするかわりに主義主張をもたず、「そこら中を歩きまわって、偶然ぶつかったものに興味を持つ段になると、それにきっちりと関係を」むすび、「その中に在る處のいいものを取って自分の養分にしよう」と云う人間である。

なによりも自分自身が希求するところを実現しようとするローファーは、その実現のために「絶対的自由」を求める。こうしたローファーの姿は「理想とか主義とかおなじもの」を追い求めているようにも見えるが、自らの希望が実現されることによってそれが固着形式化してしまい、さらに「制度化」してしまうことは好まない。自らの求めるところが社会の掟となって人々を強制し彼らの自由を束縛することをローファーは好まない。だから永遠の放浪者となるしかない。いつもひとりで孤独である。「無終の道」を歩み続けるしかない。ローファーを有島が「常習的反逆者」と語るのも無理からぬ話ではある。（新潮版第6巻375～6）

### 内田と木村——「主義の人」

「主義の人」たる「理想家」が『或る女』には登場してくる。最たるものが冒頭引用に名があがった木村と内田である。さきに内田。術後病床のまま最期を迎えた葉子は内田に会いたがる。それまでの自らの生き方が間違っていたと後悔する彼女は、死ぬまえに「償っておかねばならない」と感じる。娘定子を預けたいと思う。そのためにも内田に話がしたい、というのである。物語前半（『グリンプス』）で親族と世間が押しつけてくる因習的価値観やそれが支配する明治社会のあり方

にたいして反抗的で、したがって「ローファー」（常習的反逆者）としての面目躍如たるものがあった田鶴子（葉子）が、後半ではこのように「敗北した女」としての末路を迎えることについては議論があるわけだが、さしあたって確認しておきたいのは、宣教者としての「主義の人」内田と葉子<sup>5)</sup>（田鶴子）とのかかわりある。

内村鑑三を念頭において作家が内田を登場させているのは確かであろう。内村から内田へは苗字が一字変わっただけだし、『グリンプス』では単に「熱烈な真摯な基督教徒」だったものが、のちに筆が入った『或る女』では「熱心な基督教の伝道者」と限定される。文脈からは『グリンプス』にある「熱烈な真摯な基督教徒」でも支障はないようだが、「伝道者」とわざわざ変えてある。教育勅語不敬事件以後、名を知られるようになった内村には敵も多くて「憎む人からは蛇蝎のように憎まれ」るし、逆に「好きな人からは預言者のように崇拜されている天才肌の人」（『グリンプス』・『或る女』とも同じ）では、たしかにあった。

「天才肌の人」ということで言えば、『或る女』発表当時（1919〔大正8〕年）内村は前年くらいから本格的に手がけていた「基督再臨運動」に明け暮れている。聖書研究と研究会主催、それに小規模講演会を中心として宣教活動は派手にはおこなわなかった内村にすれば変化であった。1918（大正7）年の日記には「北は北海道から南は岡山まで講壇に立つ事58回2万人に福音を説いた」と記しているという。（『内村鑑三の生涯』411〔以後『内村』〕）一回の講演に千人以上の聴衆が集まる事も珍しくなく「一種異様な熱気」が感じられたとか。（『内村』413）「柏木というムラの教師であった鑑三は、一挙に大きなマチの有名な預言者として、街頭宣伝者のようなかたちで、多数の大衆相手に話すことを選んだ」とは伝記作者小原信の言葉である。師と仰いだこともある内村のこうした活動を有島が知らなかったとは考えにくい。

葉子の母親佐が基督教婦人同盟の仕事に本格的

に乗りだして人脈を開拓しだすと、内田は「基督の精神を無視した俗悪な態度」（『或る女』）だと憤る。『グリンプス』では「教祖の精神を無視した振舞」となっていたものが、『或る女』では「俗悪な」が加筆されることで基督教の精神性を強調する内田（内村）の姿勢が強められていることになる。「外国宣教師」を嫌っているところも日本基督教を標榜した内村にふさわしい。内村の最初の妻浅田タケとのあいだに生まれた娘ノブと、最後の妻静子とのあいだに生まれた娘ルツ子との接点らしいものも、内田について書かれた箇所に見つかる。明治17年、内村は23歳でタケと結婚するが半年ほどで別居にいたり、その年11月に単身渡米する。内村の渡米理由のひとつが結婚の破綻ではなかったか、とささやかれる所以である。（『内村』151）内村とのあいだに生まれたノブをたてにタケは復縁を迫るが、内村は応じなかった。

作品の内田はどうなっているだろう。離婚した妻と彼女とのあいだに生まれた娘について『グリンプス』には言及がないが、『或る女』では内村の実生活を念頭において加筆されたのではないか、と思われる箇所が見つかる。いわく「内田は離縁した最初の妻が連れて行ってしまったたった一人の娘にいつまでも未練を持ってゐるらしかった。どこでもいいその娘に似たらしい所のある少女を見ると内田は日頃の自分を忘れたやうに甘々しい顔付きをした。」（『或る女』7章）ルツ子にたいする内村の深い愛と、それゆえ明治45年に17歳で彼女が夭折したおりに父として鑑三が見せた嘆きは有名である。「神の手、余輩に加わりて、余輩の髀（もも）の枢骨（つがい）挫け、余輩は歩むこと能はざるに至れり」（『内村』194）離婚した妻タケとのあいだに生まれたノブにたいして、鑑三は各段の親しみを感じていたわけではないらしい。だが「離婚した妻」といい、「娘」にたいする情の深さといい、いずれも内田と内村鑑三とを結びつけるものとはなっているようである。

5) 未完の『グリンプス』では田鶴子だったものが、『或る女』では葉子に変わっている事について、上杉省和は山田昭夫が「ホイットマンの『草の葉』に因んだものである」と解釈したのを支持して「異論の余地がない」と結論づけている。

派手な宣教活動をとおして世間に浸透していたであろう内村鑑三のイメージを内田とダブらせることにより、有島は一般読者に「主義の人」の姿を彷彿させることができただろう。内田はなにより葉子の「無節操」を許すことができないピューリタンの人物である。葉子の「性」をめぐってはこれまで専門家のあいだで議論があっただろうが、ここでは生まれながらに男を惹きつけてやまず、かつ自分からも男を誘惑してしまうという、彼女の「女」としてのあり方<sup>6)</sup>それ自体にたいする批判者としての内田を確認しておきたい。

「基督に水をやったサマリヤの女の事も思うから、此上お前には何も云うまい——他人の失望も神の失望もちつとは考えてみるがいい、……罪だぞ、恐ろしい罪だぞ」（『或る女』7章）

木部との「結婚問題」<sup>7)</sup>を知ったときの内田の怒りである。葉子の結婚を直接のきっかけとして内田は葉子と疎遠になり、5年後アメリカ出立前日に訪れた彼女にも会おうとしない。権力的家父長倫理を振り回す——くたびれ果てた弱々しい彼の妻の姿をみよ——内田は、セックスをめぐっては（21世紀のわれわれから見ると）特に厳格なようである。だから、人と神にたいして葉子が犯している（と彼には見えてしまう）セックスをめぐる彼女の「罪」をことさらに力説する。葉子の「多情」が許せない、というわけであろう。

内田が言及する「サマリヤの女」（ヨハネ4 1-

30）は5人の「夫」と生活をともにした過去がある。男遍歴は派手だったのだろう。ともに歩むべき人生のパートナーにめぐり逢い、じぶんたちの存在基盤を造りあげることがかなわなかった彼女は、根無し草のように男たちを渡り歩いたのかもしれない。炯眼あふれるイエスの言葉にしたがえば「いまは夫ではない。」自分の過去を知らないはずの異邦人たるユダヤ人イエスが、正しくそれを言い当てたのでサマリヤ人の女は驚く。「わたしがしたことを何もかも言いあてた」預言者をイエスのなかに見出した彼女は、けっきょくは渴きしかもたらさない男を求めめるのではなく、信仰という「永遠の命に至る水」を、「永遠に渴くことがない」水をイエスに求めようとする。生きることの真の喜びを手に入れようとしても、充足感を得ることのできない（その意味で葉子と同じように憐れな）女の現実をイエスは受け入れる。「永遠の命に至る水」という譬えを使って信仰への道を論ずるだけで指弾はしない。だがイエスとは対照的に内田は葉子が犯した「罪」にのみこだわりの続ける。内田の妻にむかって葉子が言った「7度を70倍はなさらずとも、せめて3度くらいは人の咎も許してあげてくださいまし」とは、人をなんぞ許すべきかというペテロの問いにたいするイエスの答えであり、イエスの寛大さがあらわれた箇所である。葉子のこの言葉には、イエス自身の信仰からは隔たったところにいる内田にたいする批判と口惜しさが込められている<sup>8)</sup>。

6) 古藤と落ちあった葉子にたいして、新橋駅の「プラットフォームでは、駅員も見送り人も、立っている限りの人々」がふたりに視線を送る、と語られて以来、『或る女』は25歳の葉子が娘時代から常に男の眼を惹きつける存在であったことを繰り返して語りつづける。葉子の魅力に陥落してしまった男は枚挙にいとまがない。まだ15歳の娘だった頃には「厳格で通っている米国人の老校長」が彼女のおかげで浮き名を流したというし、同じ頃に彼女と付きあっていた10歳年上の「立派な恋人」は「思うさま〔葉子に〕翻弄」されたあと、「自殺同様な死に方をした」70歳アメリカに「婚約者」がいる立場にあるのに（そして「今度こそは立派な奥さん」になることが親族や「世間」から期待されているまさにそのときに）、古藤を誘惑したい衝動に葉子は駆られる。絵島丸が出帆するときには、葉子を「命」だといって男泣きする若者まで出てくる始末。まるで映画スターである。

7) 『グリンプス』では「離婚問題」となっており『或る女』とはあべこべである。この変更意図をめぐっては笹淵友一の解説があるが、ここでは深追いはしない。ただし氏が指摘するように「内田が狂い怒ったのは文字通り〔葉子という〕恋人の変心に出会った気分になったからであろう。」(13)というのは賛成である。

8) 『近代日本の形成とキリスト教』（1961）冒頭、隅谷三喜男氏は「明治初期日本キリスト者の基本的特質」をふたつ紹介している。プロテスタント信仰への入信者たちは自分たちの新たな精神的支柱を維新以後の新国家建設事業と表裏一体また不離不即のものとして理解していた、ということがひとつ。

もうひとつ（このほうが興味深い）は、当時日本に伝えられたプロテスタント信仰はピューリタニズムが色濃く影を落としており、したがって現在のように「福音」それ自体に価値を見出すというよりも、律法遵守精神とでも言うべき倫理的性格が強かったことである。

さて、内田のように「罪」の弾劾に固執するのは正反対の意味で葉子を苛立たせる「主義の人」は木村である。

僕らは等しく神の前に罪人です。しかしその罪を悔い改める事によって等しく選ばれた神の僕となり得るのです。この道の他には人の子の生活を天国に結びつける道は考えられません。神を敬い人を愛する心の萎えてしまわないうちにお互いに光りを仰ごうではありませんか。

葉子さん、あなたの心に空虚なり汚点なりがあってもどうぞ絶望しないでくださいよ。あなたをそのまま喜んで受け入れて、——苦しみがあればあなたとともに苦しみ、あなたに悲しみがあればあなたとともに悲しむものがここにひとりいることを忘れないでください。僕は戦ってみせます。どんなにあなたが傷ついていても、僕はあなたを庇って勇ましくこの人生を戦って見せます。僕の前に事業が、そして後ろにあなたがあれば、僕は神のもっとも小さい僕として人類の祝福のために一生を献げます。(『或る女』30章)

葉子と倉地が肉の喜びをむさぼっていた年の暮れに、五十川や古藤からの便りでふたりの暮らしぶりを知っているはずの木村が彼女に宛てた手紙である。待ちわびた「許嫁」には新婚生活を拒否され、おまけに彼女の帰国道中を託した男が彼女と肉体関係に陥っていたことへの憤りも恨みも見あたらぬ。内田をめぐって葉子が口にした「7度を70倍許す」態度なのである。木村に葛藤がなかったはずはない。だが、わだかまりを越えて彼

女と彼女の過去を受け入れようとする彼の愛と信仰はきわめて寛大である。聖書の教えに立って判断すれば模範的、かつ正統的である。

『グリンプス』と『或る女』を読み比べても、木村には大きな変化はないようである。ただし、木村が直情径行で信仰が生真面目すぎる点について、最初は「最も活動的な基督教徒」(『グリンプス』)だったのが、『或る女』では「快活な活動好きな人として知られた男」へとトーンダウンしている。一本気な木村のおかげで田鶴子は「執拗な求婚に攻められ」(『グリンプス』)たことになっているが、『或る女』では「一生の願いとして葉子との結婚を申し出た。」に書き改められている。カバンに聖書を持ち歩く(21章)男として田鶴子の想像のなかに出てくる(『グリンプス』)木村だったが、『或る女』ではこの部分は削除されている。凝り固まったゴリゴリの信者としてのイメージを押さえ、誠実かつソフトな人柄であるとの印象を与えるための推敲が見られる。「主義の人」としての露骨さをおさえ、彼にたいする反発を読者におこさない工夫である。

ところが、このように淡泊な人柄になっても、木村をまえにすると葉子(田鶴子)は苛立ち辟易してしまう。彼女の「欠点」や「悪傾向」(『グリンプス』)を熟知すると豪語する木村は、いかにも許しの人らしく「僕はクリスチャンである以上、何とでもして(この部分『或る女』で加筆)葉子を救い上げる。救われた葉子を想像してみたまえ。僕はその時一番理想的な better half を持ち

ㄨ 具体例をみよう。新島襄ゆかりの安中教会で、新島が入信者に申し渡した「べからず」集を隅谷氏は紹介している。いわく「信者は酒を飲むべからず、男女混合の湯に入るべからず、安息日に旅行すべからず、常に聖書を携帯すべし」と。(『日本プロテスタント史論』33) こうした律法的条項に違反したもののなかには、教会を追われたものも少なくなかった。「多忙で一日といえども休みえない養蚕期の安息日に、労働をすることは信徒の本分にもとるかどうか」が大問題になり、「飲酒は教会から除籍される一要件であった。」(同上92) この時期のキリスト教にあっては、厳格な倫理に則った生活をおくることこそが「信仰」である、と信者が信じて疑わなかったのがわかる。

そもそも受洗にさいして教会にとって「最も重要視された事柄は「キリストのために死ぬことができるか」ということだったという。キリスト教徒となることは「この世と戦うことを意味したから、信仰の告白は生活における戦いの決意」(同上32)だったのである。『余は如何にして基督信徒となりし乎』冒頭、内村が余が生まれてきたのは「戦う」ためだったという言葉が思い出される。

おなじ群馬の桐生教会には受洗後数年のうちに除名された者について記録が残っており興味深い。それによれば明治11年の教会建設から20年を経て、そのあいだに受洗した「190余名」のうちで、いまも活動しているのは「44, 5名」にすぎず、3/4は姿を消している、という。(同上92) 司牧にあたった当の牧師が嘆いているのだから確かだろう。明治初期のプロテスタント信仰は厳格だった。21世紀日本の新旧キリスト教とは厳しさにおいて異質の信仰だった、と言うべきではあるまいか。

得ると信じている」（18章）と言ったことになっている。これこそ葉子（田鶴子）には「第一（この部分『或る女』で加筆）我慢のし切れない嫌悪の種」なのである。ローファーと「主義の人」との乖離である。

葉子（田鶴子）が彼をどう捉え感じていたかを考えるとき、『グリンプス』と『或る女』を比べて見逃せない加筆に気づく。木村がすごすごと帰ったあと、倉地の胸で眠る葉子（田鶴子）が見た悪夢である。『グリンプス』では「恐ろしい凶夢」（21章）とだけしか書いていないが、『或る女』には夢の中身が書き込まれている——葉子は「殺してはいけないいけないと思いながら人殺しをしたのだった。一方の眼は非常に眉の下にあるが、一方のは不思議にも眉の上にある、その男の顔から黒血がどくどくと流れた。男は死んでも物凄くにやりにやりと笑い続けていた。その笑い声が木村木村と聞こえた。……葉子は一心に手を振ってそこからのがれようとしたが手も足も動かなかった。」（『或る女』21章）となっている。この第21章の終わりには、「木村」という名前が三角形になるように15回も繰り返され、木村にたいする葉子の強迫感が視覚的に（ひょっとすると茶目っ気をこめてだろうか）表現されている。葉子（田鶴子）の秘められた憎悪と殺意はこれほどすさまじい。

冒頭引用で木村にたいして彼女は、キリスト教の教えに忠実たろうとして自己犠牲を厭わない人間への同情を語った。だが時をおかず、その言葉とは裏腹に木村を殺す夢まで見てしまう。彼を受け入れることができない。25歳の短いそれまでの人生で、葉子の自己実現を阻んできたすべての「彼女の敵を木村の一身におっかぶせて、それに女の心が企み出す残虐な仕打ちのあらん限りをそそぎかけようとするのだった。『あなたは丑の刻参りの藁人形よ』（『或る女』20章）——木村に面と向かって葉子が口走った呪詛の言葉である。

「許しの人」木村にたいして葉子が嫌悪を感じる理由はまだある。彼が実生活でも優等生的だからである。「若いときに父親に死に別れてから、万事思いのままだった生活からいきなり不自由な浮き世のどん底に放り出されながらも、めげもせ

ずにせせと働いて、後ろ指をさされないだけの世渡りをして、誰からも働きのある行く末ののもしい人」（『或る女』21章）としてアメリカで成功しつつある。葉子の親族からも評判がすこぶる良くて将来は「第一流の実業家に成り上がるにきまっている。」という御墨付。信仰は揺るぎなく、やがて「信用と金」をそなえて世間の尊敬を集めよう——要するに葉子とは対極にいる人間である。信仰の弱者たる葉子が感じるバツの悪さも理解できる。

木村は『惜しみなく愛は奪う』で語られる二番目の生き方、すなわち「智的生活」実践者なのである。順境から逆境に陥ったにもかかわらず、苦難を相手にさまざまな経験を積んで「知識」を得た彼は、その知識をキリスト教信仰という自らの盤石のごとき基盤に注入してゆくことを怠らない。その結果として信仰に基づく存在基盤が生長した木村は、葉子をめぐる「外界」の動きに順応をみせながら、自らを律する道徳律をさらに安定化させてゆく。こうした過程で屈辱や苦痛を木村は味わったに違いない。だが努力の人である木村はそれらを克服できた。「智的生活」を「人類の倦むことなき精進の一路」（『惜しみなく』11章）と解釈して一定の讚美を惜しまない有島の言葉通りの人生であろう。

### 破綻してゆく「本能的生活」

だがローファーがめざすのは、もちろん「本能的生活」である。変化と緊張をはらんだ外界との関係で「智的生活」は自己保存を図ろうとする。外界とのかかわりを「平安無事」に継続させようとする。そのためには自らの経験によって養った知恵を用いながら、外界との関係が破綻をきたさないように「同一軌道」を繰り返すしかない。「智的生活」にあっては外界と自己（作家の言う「個性」）は究極的融和もないままに分裂して二元的であり対立的である。木村の姿に示されるような個人による努力といい精進といい、いずれも究極的には外界との「調節」を求めようとする難行であり、そこに流した汗と苦勞による報酬はあっても解放された真の喜びを「個性」は見いだせない、と作家は言う。

いっぽう「本能的生活」は人生から「進歩と創造」を産みだそうとする生き方、とされる。外界との対立調整に努める必要のない生活、「私が私自身になりきる一元の生活」である。(『惜しみなく』6章) そうした生活にあっては「智的生活」に見られるように外界が個性に働きかけるのではない。逆に個性が本能という「自己必然の衝動によって自分の生活を開始する。」自己と外界という二元的世界にあって、ヘゲモニーを握るのは「個性」であり、だからこそ外界と自己との対立調整はなくなる、という有島得意の論理である。では本能的生活の実践者はどこに見つかるのかと言えば、御存知のとおり「愛の本能の化身」となった男女と「遊戯に熱中する無邪気な小児」だ、という。なぜなら「自由なる創造の世界」である「本能的生活」は「遊戯の世界であり、趣味の世界であり、無目的の世界である。」からということになるらしい。「らしい」などと書いてしまうのは、作家自身が「本能的生活」の中身を言葉を用いて十分には説明しきれていない、と告白したりするからである。「理知的表現を超越している」(『惜しみなく』12章)と認めざるを得ないほど観念的だからである。しかし、それよりもいま考えねばならないのは、こうした作家が評論のなかで力こぶを振って解説した「本能的生活」が小説世界のなかで、どのような扱いを受けているか、ということである。

『或る女』を読む際に読者が戸惑うのは、繰り返せば『グリンプス』であれほど男たちを翻弄し、明治家父長制社会やその先棒を担いで生徒の自由や個性を圧迫する学校、さらに抑圧的クリスチャンたちを相手に奮闘した田鶴子(葉子)が、敗れてゆく姿である。この戸惑いは『或る女』ときびすを接して翌年発表された『惜しみなく愛は奪う』が本能的生活を礼賛するのを見るにつけ、強まりこそすれ弱まりはしないだろう。

田鶴子が葉子と改名されたのは、ホイットマンにたいする作家の共感がなせるわざだった、ということについては触れた。ホイットマン流の自己充足を追究するにふさわしい主人公になると、田鶴子は姿を消して「葉子」が『或る女』の主人公となった。ならば、なぜ葉子はあのように

惨めな死を迎えることになるのか。上杉省和が言う「虚無的な生」(282)しか与えられないのか。その意味を考えるしかない。

## 子宮の病

葉子の死によって完結することになるこの物語をふり返ってみると、彼女の「性」は否定的な扱いを受けている、とわたしには見える。葉子をめぐって有島自身がどのような共感の言葉を語ろうと、作品自体は彼女の性を罰しているのではないか。葉子は子宮という女性をして女性たらしめている器官に欠陥をもつ。「子宮後屈症と子宮内膜炎」(38章)である。手術不成功が引き金となった葉子の死は、「子宮底穿孔」(49章)から「腹膜炎」を併発したのが直接原因だったのだろう。あっけないこの幕引きはしかし、物語の最初から示唆されていた。『グリンプス』でも、6年後に完成された『或る女』でも導入部で彼女が「ぎゅっと錐でももむ」(『グリンプス』4章)ような痛みを襲われることが「よく」あった、と紹介される。ただし、ここ第4章では「仮病」を葉子が使っていたということなのだが、こののちも葉子が腹の痛みを堪える場面が繰り返され、やがてその「痛み」は問題の「下腹部の痛み」へと連なってゆくかのようなのである。まるで「嘘」からでた誠といった感がある。興味深いのはそうした場面では、彼女の女としての「性」を感じさせる度合いも強まってゆくことである。

『或る女』5章で葉子は古藤を誘惑する。腹痛を理由にその夜は横浜泊りとしたいと葉子が求めるのを、古藤は(律儀で真面目な彼らしく)聞き入れない。結局最終列車でふたり共々帰京する。注意すべきは『グリンプス』にはかすかにしか見られないのに、のちに『或る女』では大幅に加筆された古藤への葉子の誘いである。「その晩葉子はこの少年のような心を持って肉の熟した古藤に罪を犯させてみたくなって堪らなくなった。一夜のうちに木村とは顔も合わせることでできない人間にしてみたくなって堪らなくなった。古藤の童貞を破る手を他の女に任せるのが妬ましくて堪らなくなった。幾枚も皮を被って古藤の心のどん底に隠れている欲念を葉子の魅惑力で掘り起こしてみた

くって堪らなくなった。」

子宮をめぐる葉子の体調不良は、葉子がシアトルから帰国の途につく直前、つまり倉地との「ハネムーン」（この言葉『グリンプス』18章には使われているが、『或る女』では削除）に出かけようとするそのときに地の文で確認されることになる。「実際かなりながい以前から子宮を害しているらしかった。」というのがその説明である。このち帰国したふたりは短期間とはいえ「本能的な生活」を楽しむ。「ふたりだけで世界は完全だった」し、彼をまえにした葉子は「そうだ生まれてからこのかた私が求めていたものはとうとう来ようとしている。しかしこんなことがこう手近にあらうとは本当に思いもよらなかった。私みたいな馬鹿はない。この幸福の頂上が今だと誰が教えてくれる人があったら、私はその瞬間に喜んで死ぬ。」(26章) まさに至福である。ふたりは「初めて恋を知った少年少女が世間も義理も忘れ果てて、生命さえ忘れ果てて肉体を破ってまでも魂を一つに溶かしたいとあせる、それと同じ情熱を駆け合って互い互いを楽しんだ。」(28章)

明治35年正月、葉子は「なんといっても自分が望み得る幸福の絶頂に近い所にいた。倉地を喜ばせることが自分を喜ばせることであり、自分を喜ばせることが倉地を喜ばせることである」(31章) 倉地という「外界」との一元化がみられる。『惜しみなく愛は奪う』に出てきたとしてもおかしくないほどのこうしたふたりの姿だが、そこに子宮の病が影を落としている。この幸福絶頂期に倉地の妻にたいする葉子の不安がうごめきだし、そうした葉子の動揺と歩調をあわせるように「航海の初期における批点の打ち所のないような健康の意識はその後葉子にはもう帰ってこなかった。寒気が募るにつれて下腹部が鈍痛を覚えるばかりでなく、腰の後ろの方に詰めたい石でも釣り下げであるような、重苦しい気分を感じるようになった。」とある。つまりこの章は幸福絶頂期⇒倉地の妻を意識⇒子宮の病という順番で展開しており、「幸福絶頂期」は倉地の妻や16歳の美しい娘に成長した愛子にたいする嫉妬に、そして最後には術後の悲惨な結末へと連なっていくのである。本能的な生活はいちどは成就している、と言うべき

だろう。だがそれは社会とは隔絶した暮らしを営んでいるあいだだけのものである。葉子が自分と倉地の部屋を「天岩戸」にたとえる場面がある(28章)が、ふたりだけの世界とは要するに社会という広い「外界」とは切り離された神話の世界でしかない、ということだろう。田川博士夫人や五十川女史のさしがねで新聞はふたりの関係をセンセーショナルに報じるし、職を失って生活に困った倉地は、あげく国家機密を売って犯罪者となりはてる。子宮不全も手伝って葉子自身もヒステリー発作をたびたび起こし、妹愛子と倉地の仲を疑う。それがさらなるヒステリーの原因となり、あげく自己制御もままならない。愛子にたいする嫉妬と猜疑の塊となった彼女は愛した男との関係を自らの手で悪化、破綻させる。けっきょく本能的な生活の追求者にしてローファーたる葉子は、「社会」という外界とのかかわりにあっても、また自ら自身の内部にあっても、『惜しみなく』で有島が礼賛する「個性」が抱え込む未熟さのために、自らが求める生活を破局へと導く手助けをした結果となっている。

追い打ちをかけるように、子宮手術の不成功が彼女の運命を最終的に決めることになる。女としての魅力を発揮して男性(古藤)に迫ったり、男性との合一感(倉地)にひたる葉子だが、彼女の妖しい魅力や恋愛の至福感は子宮不全を原因とする痛みと背中合わせになっており、双方は比例的に語られてゆく。ところが倉地との「本能的な生活」が早々と幕を下ろし、やがて彼を失う頃にまで物語が進行してゆくと、それに応じて痛みだけはひどさを増す、という図式である。葉子の「個性」といい「肉体」といい、いずれも彼女の求める本能的な生活の継続を邪魔していることになっている。

葉子の性を見つめる作家のまなざしは複眼的、流動的である。アンヴィバレントでさえある。葉子を保守的価値観に支配された明治社会にたいする反逆者たらしめているのは、女としての彼女の魅力である。妖しい魅力にうらうちされた優れた知性である。だが、葉子の色っぽさは古藤誘惑にあらわれるように「背徳願望」と表裏一体をなしている。古藤への葉子の行動を「悪魔じみた誘

惑」とも（われわれの言う不倫を）「罪」とも語った作家は、この小説のなかでは保守的な道徳に軸足を置きながら葉子とのあいだに距離を置いていることになる。いっぽうでは明治キリスト教が「性」にたいしてとっていた厳格さに反発しながら、同時に彼女の奥深いところに潜む「魔性」を自らの筆で白日の下にさらし終えたとき、作家はギリギリのところでは主人公に憐れを感じつつも彼女を突き放すしかなかったのではないか。

古藤がモラリストとしての有島の側面を体現している、という解釈がある。じっさい古藤は葉子の誘惑を明快に斥けているし、葉子との本能的な生活に浸る倉地をまえに、彼と葉子との生活を批判するのも古藤である。

「葉子さん、あなたは本当に自分を考えてみて、何処か間違っていると思ったことはありませんか。誤解しては困りますよ。僕はあなたが間違っていると言うつもりじゃないんですから。他人のことを他人が判断することなんかはできないことだけれども、僕はあなたが何処か不自然に見えていけないんです。……もっともっと clear に sun-clear に自分の力だけのこと、徳だけのことをして暮らせそうなのだとはく自身は思うんですがね」（『或る女』41章）

「自分の力だけのこと、徳だけのこと」と古藤が言うのは、葉子にたいする「智的生活」への回帰呼びかけであろう。倉地と縁を切って、約束されていた木村との生活に立ち返れ、という贖いへの復帰である。「個性」に立ち返れ、というスローガンは人間生活の理想として『惜しみなく愛は奪う』が謳う「本能的な生活」の目指すところである。葉子と倉地が蜜月時代をおくるふたりの姿に描きだされるのは、葉子の「個性」といい野獣のごとき「原人」たる倉地の「個性」といい、ふたつの「個性」が「性」をとおして融合した稀有な一瞬だった。『惜しみなく愛は奪う』がめざした理想の暮らしが実現したそのときに、しかし古藤は「智的生活者」として葉子を批判する（「あなたには僕らが持っている良心というものがないんだ。」）ことで冷や水を浴びせる。結果からみれば、古藤こそが正しく葉子の未来を言い当ててい

た。木村とならんで「智的生活」の実践者たる古藤（そして岡）こそが社会に受け入れられて社会を支えてゆく。葉子は働いたことがない。明治社会で女がとるべき道とされた良妻賢母とならなれ（「習性的生活」の否定）、木村や古藤のような「智的生活者」を軽蔑するのだから、残された道は「本能的な生活」だったわけだが、それは続かない。

作家は男遍歴を繰り返す葉子に魅力を感じつつ、しかし同時にそうした生活に背徳性を嗅ぎとり、子宮の病を設定することによって、彼女の人生が破綻するように最初から仕組んでいたのである。これは葉子の性をめぐって一元化を目指した小説が、けっきょくは二元論のまま終わっている、ということだろう。

『グリンプス』が『或る女』となって完成する前年の1918（大7）年、志賀直哉が有島について「私（有島）の内部には明らかに二元が働いているのに早計にもそれに一元的解決を求めようとあせるところに致命的な破綻がある」と喝破したとき、作家は答えている。

「私は実際今でも心のなかには苦しい二元の争闘を意識しています。ただ私には二元がいつまでも二元であってはならぬと云う要求と、おぼろげながら一元的境地の何物であろうかと云う解決を待つようになったのです。それを私は「惜しみなく愛は奪う」や「草の葉」等に於いて表現しようと試みています。然し作物のなかに私の一元観を絶対肯定的に表現したものではありません。また実際あり得ないのです。ある人は私が煩悶ばかりを描いて解決をあたえていないのを非常にもどかしかって責めてくれました。然し私は煩悶を描いてかすかな解決の暗示を提供する、その外に出るのは自分を偽るものだと思っています。」（「予に対する公開状の答え」〔新潮版第5巻383〕）

「然し作物のなかに私の一元観を絶対肯定的に表現したものではありません。また実際あり得ないのです」というところがポイントだろう。敬愛するホイットマンに備わった楽天性とは対照的に、有島自身には懐疑と否定がつきまとう。うえの記事を書いた前年1917年5月には「惜しみな

く愛は奪う」はすでに脱稿されており、『新潮』6月号に掲載された。このとき発表された「惜しみなく愛は奪う」こそは、3年後に発表される評論『惜しみなく愛は奪う』の中核的思想をあからさまに提示するものだった——「愛」とは奪う力（「神とは與える力ではない奪う力だ。」）であり、「個性」は自らを拡張充実させるために、愛することによって他を獲得して自らのなかに取り込むのだ、という考え方はそのまま『惜しみなく愛は奪う』に繰り返される。

だが葉子は倉地を取り込むことなどできなかった。小説は評論とは異なる。論理の展開とその収斂が命である評論とは違って、生きた登場人物こそが問題となる小説にあって、「外界」と「個性」とのかかわりは『惜しみなく愛は奪う』におけるように抽象的議論に終わらせるわけにはゆかない。反逆児たるひとりの女性と彼女を取り巻く、律法的で息苦しくなるほどの道徳性を求めるキリスト信者たちが構成する世界との葛藤という具体的な条件のなかで繰り返し広げられる。こうした狭い世界のなかで奪いとる愛によって支えられる本能的な生活は可能か。答えは否だった。愛による一元化を「絶対肯定的に表現」できたものなど「あり得ない」とする作家の言葉どおりの結果を小説はわれわれに語る。愛による一元化を理想とする本能的な生活を作家自身が作品によって否定することになっている。

### 離教と作家の死

ローファー早月葉子と本能的な生活の破綻について触れておきたいのは、やはり作家の「離教」である。有島に関心を持つ読者は、誰しもこの問題を避けて通れないだろう。維新後の近代化のなかでキリスト教と向きあった文人は多かったが、内村や新渡戸とおなじほど真剣に、有島はこの宗教と自らとのかかわりを考え抜いた人であった（だからこそ妻安子の死をきっかけに内村は信仰への復帰を有島に求めたのだ）。亡くなる10年以上もまえに、有島がキリスト教信仰を離れたのは周知

の事実であり、それを証言する材料は『リビングストーン傳』第4版序文や『惜しみなく愛は奪う』をはじめ数多い。有力信者たちの偽善、愛は自己犠牲ではなくて自己拡張だといい、キリストは最高のローファーとして人々を自分のなかに取り込んだ、云々……作家がこの宗教への信仰と信者のあり方に疑問と嫌悪をもっていることはわかる。『迷路』は信仰の揺れを語って余すところがない。だが両親のあれほど強い反対を押し切って入信し、サムライ基督教教祖から自らの後継者とまで目された真摯な信者だった人間の心に、かつての信仰の余韻が見つからない、ということはわたしには考えにくい。信仰の遊戯化が進む21世紀の日本キリスト教はいざ知らず、「明治基督教」はそれほど柔（やわ）ではなかったはずである。全人格のかかわりを求めた。生きるか死ぬかといった切羽詰まった取捨選択を求める宗教が、その形跡を残さないはずがあるか。

冒頭の引用にあるとおり、木村にたいして葉子は「神様はわたしみたいなものをどうなさるか、しっかり眼を明いて最後まで見ています。」と宣言した。これにたいする答えは物語終結直前に示されている——「間違っていた……こう世の中を歩いて来るんじゃない。しかしそれは誰の罪だ。分からない。しかし兎に角自分には後悔がある。できるだけ、生きてるうちにそれを償っておかなければならない」（『或る女』47章）

こうした悔悟に至るまでの道のりのなかで、容態悪化と歩調を合わせるように葉子は倉地をめぐる嫉妬に苦しんだ。彼の妻にたいしては以前同様修羅を燃やすし、倉地（や岡、古藤）と愛子のあいだに肉体関係があるのではないかと、皮肉にも自らの過去を愛子にかぶせて邪推し、あげく姿を見せなくなった倉地は別の女とつるんでいるのではないかと、とまで妄想する<sup>9)</sup>。これまで葉子をめぐって迷い苦しんだ男たちと立場を代えた彼女は、今度は自分が本能的な生活のつけを払うことになった。自らの「性」のために苦しまねばならなかったのである。

9) 葉子のヒステリー症状を描写するにさいして、作家はハヴロック・エリスの大著 *Studies in the Psychology of Sex* (1898~1927?) を参考にしたとされる。

なんというあさましい人の心だろう。結局は何もかも滅びて行くのに、永遠な灰色の沈黙の中に崩れてしまうのに、目の貪婪に心火の限りを燃やして、餓鬼同様に命を噛み合うとはなんというあさましい心だろう。しかもその醜い争いの種を播いたのは葉子自身なのだ。そう思うと葉子は自分の心と肉体とがさながら蛆虫のように汚く見えた。……なんのために今までであってないような妄執に苦しみ抜いてそれを生命そのもののように大事に考え抜いていたことか。(『或る女』43章)

「なんのために今までであってないような妄執に苦しみ抜いてそれを生命そのもののように大事に考え抜いていたことか。」とは、倉地との本能的な生活への希求であろう。それを葉子は自ら否定した。そうした生活に最高の価値を置いた自らの心と肉体への憎悪に近い絶望さえうかがわれる。ここでも葉子の生き方は彼女自身によって否定される。

本能的な生活の破綻を結果としてまねいた性にたいするこうした「罪」意識こそ、かつて作家の心を占めた信仰の負の余韻ではないか、とわたしは憶測する。ホイットマン流の大方かで解放された「性」にあこがれ、「本能的な生活」を讚美しつつも、いっばうで作家は性の解放がもたらすであろう結果にたいし、ホイットマンのように楽観的にはなれないままである。国土が倍増してフロンティアが西に姿をけし、アメリカの発展と活力が(南北戦争で一度は頓挫しても再統一されて)目に見える形で国民に示され、未来にたいして人々が限らない希望と期待をいだいた19世紀後半を背景として登場したのが、このアメリカ国民詩人だった。そうした歴史的文化的背景を欠いたままの日本人作家が、ホイットマン流の予定調和的な人間関係を小説に描きだすことは無理だったのでは

ないか。

有島の死については今更という気がする。だが専門家の失笑を覚悟で言えば、彼の最後は小説世界では不可能だった「本能的な生活」を行動によって実現するというものではなかったか。作家や波多野秋子の遺書などを読むとそう思わざるを得ない<sup>10)</sup>。

キリスト教信仰は神の秩序が世界を支配することを受け入れるよう信者に求める。神への従順に基づいて受容したその世界のなかで、信者は自己の位置づけを求められる。そうすることで「自由」になる信者はいる。自己存在の不安を神に委ねることができるから。だがこれは見方を変えれば信仰によって自らを縛るということでもある。信仰が深ければ深いほど、神の秩序は絶対性を帯びて信者を束縛してくる。そうした秩序に有島は反発した。否定した。代わりに「個性」の命ずる生を追究して「自己完成」を達成しようとした。内村の言う「神への反逆」である。もちまへの潔癖症じみた誠実さを発揮しながら観念的(とわたしは思う)理想を追求したこの作家にとって、肉体の滅びはどちらかと言えば副次的な意味しかなかっただろう。死の6年まえ、遅くとも大正6年頃にはこうした信念はできあがりつつあったようだ。以下ふたつの資料はこの時期に発表されている。

「個性が強烈であればある程愛の活動も亦めざましい。遂にある世界が——時間と空間をさへ或る程度に撥無する程の拡がりを持った世界が——自己の中にしっかりと建立される。其世界の有つ拡充性が弱いはいかなる肉体をぶち壊すのだ。破裂させてしまうのだ。そこで難者の云う自滅とは畢竟何だ。夫れは自己の亡失を謂うのではない。肉体の破滅を伴う永遠な自己の完成をこそ指すのではな

10) 足助素一宛てのものが特に有名なようだ。いわく「森巖だとか悲壯だとかいへばいへる光景だが、実際私達は戯れつつある二人の小児に等しい。愛の前に死がかくまで無力なものだとは此瞬間まで思わなかった。」森本厚吉に宛てた遺書には「私達は愛の絶頂に於る死を迎へる。他の強迫によるのではない。」母と三人の息子に宛てたものには「仕方がありません。……私は心からのよろこびを以てその運命に近づいてゆくのですから。凡てを許して下さい。」弟妹にあてたものでも「あき子と愛し合ってから私は生れてはじめて本富の命につきあたりました。……私達は最も自由に歓喜して死を迎えるのです。」(筑摩版第14巻667～9)秋子の遺書からは、ふたりの決意がなごらく揺るがなかったのがわかる——「どうせこの十一月か十月の末には結末をつける筈だったので、それが四五ヶ月早かった所で私どもの死の気持には少しも変わりはありません。」(筑摩版第14巻770)

いか。」（『惜しみなく愛は奪う』筑摩版第7巻144）

「自己の完成という事は前述した通りに物質的な意味に於いての完成でない事は前にも申しました。自己全体の完成です。自己全体の完成から考えると、肉体のごときはその極一小部分の働きしか助けてはいません。あまりに激しく自己完成の本能が働いた時、誤って肉体の破却せられるのは極見易い理ではありませんか。」（『自己の考察』〔筑摩版第7巻411〕）

個性が自己完成のために他者を取り込もうとする愛が強ければ強いほど、肉体と肉体の滅びは重要性を持たなくなる、というのである。これは3年後評論『惜しみなく愛は奪う』のなかで、作家の現実の死を予告するような以下の言葉となつてあらわれる。

「人間は必ずいつか死ぬ。いつか肉体が減びてしまう。それを避けることはどうしてもできない。しかし難者が、私が愛したが故に死なねばならぬ場合、私の個性の成長と自由とが失われていると考えるのは間違っている。それは個性の亡失ではな

い。肉体に破滅を伴うまでに生長し自由になった個性の拡充を指しているのだ。」（『惜しみなく』18章）

創作上の行き詰まりも確かにあったのだろう。だがそれを差し引いても、作家のいう「愛の成就」のまえにあつて命を絶つことへのためらいは強くはなかったのではないか。蛆に覆われた亡骸はわれわれから見れば「思想の破綻」だろうが、作家自身からすれば「思想の勝利」だったということか。三島の死を思い出す。

#### 参考文献

- 有島武郎研究会 川鎮郎・宮野光男『有島武郎とキリスト教』（有島武郎研究叢書 第七集）右文書院 1995年  
上杉省和『有島武郎—人とその小説世界』明治書院 1985年  
鈴木俊郎ほか編集『内村鑑三全集』岩波書店 1982年  
隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』新教出版社 1961年  
福田準之輔編『復刻有島武郎 或る女のグリンプス』山梨英和短期大学国文学研究室 昭和45年